

南アルプス市立小笠原小学校学校関係者評価書

令和4年 1月28日(金)

学校関係者評価委員会作成

第二回 学校関係者評価委員会(書面開催)

方 法：書面開催(学校評価について文書にて提案し、ご意見を書面にて提出していただいた。)

評価者：学校関係者評価委員

名取 昇 (小笠原区自治会長, 学校評議員)
河野 広 (山寺区自治会長, 学校評議員)
齊藤 至 (元小笠原小学校校長, 学校評議員)
野中 雅子 (主任児童委員, 学校評議員)
島崎 進 (民生委員協議会会長, 学校評議員)
相原 千里 (元小笠原小学校校長, 学校評議員)
新津 岳 (元市教委教育部長・教育行政, 学校評議員)
新沼 有美 (PTA会長)
飯久保一男 (校長) 志村 征俊 (教頭) 有野 清美 (主幹教諭)

内 容

学校から書面提案の内容

- ①学校関係者評価の趣旨
- ②本年度の学校経営方針並びに現状
- ③学校評価の方法について
- ④評価の全体的な傾向について
- ⑤教職員自己評価シートの内容と結果について
- ⑥児童アンケートの内容と結果について
- ⑦保護者アンケートの内容と結果について
- ⑧学校評価から見られる成果や課題, ならびに改善策について

《学校関係者評価書》

I 学校関係者評価委員から出された主な意見

【全体評価について】

- ・ 学校評価に係る総合的な評価が概ね良好な水準であるとのことだが、これは本年度教職員が努力された結果であると思う。
- ・ 少しだが、コロナの影響を感じた。その中でも、保護者が学校への信頼を寄せていると思う。
- ・ 特段前回からは大きな違いはないと感じる。前回のアンケートからこのアンケートの間に状況が大きく変わるような劇的な変化要因はないし、順当な評価だと思う。評価の最後にあるような、いくつかの気になる評価項目に対しては、継続して最適な対応をしていくことが改善に繋がると思う。
- ・ 全体的に劇的に変化した項目はないが、このアンケートを来年度以降も続けるのであれば、教職員、児童、保護者の自己評価がより上がるよう出来ることを各自が考えていくべきだと思う。
- ・ 概ね、適正な評価だと思う。

【教職員自己評価について】

- ・ ICTの活用をされていて「かっこいい」。児童との対話も難しいと思うが、ソーシャルディスタンスを保ちながらも、より続けてほしい。
- ・ コロナ禍を一過性のものと捉えることなく、本来の学校教育を考える機会でなければと思う。今ほど「地域に学び地域に返す学校教育」が希求されている時代はない。地域、家庭の教育力が困難な時代、ひとり、学校教育が死守している現状を、市行政にご理解いただき、地域、家庭の教育力を取り戻すお力添えと同時に「どの子にも涼しく風の吹く日かな」龍太。どの子も受け止める教職員の明るさ、おおらかさ、豊かさ、健康を大事にされることを願っている。
- ・ 従来行ってきた保護者等に対する広報活動が制限されている状況では、よりお便りやHPを通じての広報活動が重要になってくると思う。出来れば即時性のあるHPなどをもっと活用してタイムリーに情報提供するために、HP更新を校長先生ばかりに任すのではなく、各先生方が積極的に利用できるように検討する必要がある。また、地域の人材活用をより積極的に推し進めることでは、所謂勉強ばかりでなく例えば、小学生には多少難しいかもしれないが、経済の仕組み・銀行の役割等「生きる学問」の学習も今後進めていってもらいたい。これらに多少でも興味を持ってもらえれば、「生活の中での主体的な深い学び」にも関連していくと思う。
- ・ ④の危機管理マニュアル理解と指導の数は100%になり最重要事項の「安心安全な学校づくりの推進」が順調に進んでいることは喜ばしい。また、他の項目でも、100%になったものも多く、敬意を表す。⑮のあいさつ指導のAも増加しており、以前に比べ児童もよく挨拶してくれる。⑲では否定的な回答がやや増えているが、年度の後半でこういう回答が増えるのはむしろ自然だと思われる。なぜなら、先生方が教えなければならぬ量も多く、全ての授業で「対話を意識した学び合いの授業」は時数的にも不可能ですし、その必要もないと思われる。
- ・ 自己評価が上がってきている項目もあるが、下がってしまった項目も見られる。引き続き、向上心を持って学校生活に取り組んでいただきたい。
- ・ 教育に対する真摯な態度が感じ取れる。

【児童アンケートについて】

- ・ 学校や家での出来事を話したい気持ちは皆あると思うので、それを話し易くさせてあげることが必要だと思う。
- ・ 4点ほどの気になる点が検討項目として記載されており、そのいずれもが前回アンケートよりマイナスになっているが、このマイナスは誤差範囲として気にすることはないと思う。ただ、「自分の考えを伝えている」項目では、唯一2点台で学校としては気になる点だと思う。英語の追加や変化していく教育課程等、小学校教員には大変な現状だとは思いますが、児童の考えを引き出すような授業の創意工夫をお願いしたい。また、「相談できる友達の有無」等も児童には小学校生活で重要なポイントだと思う。6年間の長きにわたる小学校生活を楽しい思い出に出来るようクラス内での目配り、心配りをお願いしたい。
- ・ コロナ禍、これまで見えなかった児童の暮らしが覗くことになる。保護者のいら立ち、不安などは一番弱い児童に当てられることになり、受け止める学級が問われている。今まで以上に、児童の観察と支援が必要になると考える。アンケートに「うまくいっていない」と答えた児童の勇氣に答え、加勢する学級づくりを期待する。
- ・ 前回、「保護者アンケート⑬と比較すると、⑱ルール（やくそく）が「ない」と思っている児童が26.2%（今回24.5%）もいるのに、⑬でルールを「決めていない」と思っている保護者は6.7%（今回8.5%）しかいない。児童の⑱と保護者の⑬が同じことを問うているとすると、この20%

近い開きは何なのか。意識の相違や解釈が気になるところ。」と指摘しましたが、依然として課題がありそう。

- ・ ④⑧⑨⑩の項目のC・Dがもっと少なくなるとよいと思う。このアンケートが、子どもたちが自分の生活習慣や学習、生活に対する意識を見直す機会になっているとよいと感じた。
- ・ 優等生が大半と思われる結果。

【保護者アンケートについて】

- ・ お忙しい中でお子さんとの時間を作るのは大変だと思いますが、お子さんへの思いは変わっていないと感じた。
- ・ 「教職員アンケート」「児童自己評価」に記した点がプラス方向にもっていければ、保護者アンケートでの気になる項目も自ずと改善されると考える。
- ・ ⑥の「相談できる先生がいる」が増え、⑦のA、Bも増えれば喜ばしい。③「朝ご飯を食べて登校」も増加し、他のほとんどの項目で改善が進んでいる。
- ・ ⑤⑥の項目の「いない」「分からない」がもっと少なくなるといいと思う。また、スマートフォンを持たせることは各家庭での判断によるが、使い方についてのルールは決めるべきだと思う。
- ・ 子どもにしっかり向き合っているように感じられる。

【その他】

- ・ 「禍を転じて福と為す」という言葉がある。コロナ時代は、学校教育、とりわけ義務教育の在り方を考える機会を得たと思う。「見れば分かる」かつての視聴覚教育同様、オンライン教育等が重視されると考えられるが、家庭の現状もあり、機器は必要に応じてと考えます。「地域に学び地域に返すふるさと教育」は、ふるさとで、人が教える、人から学ぶことが基本になると考える。
- ・ 「密を避けての教育」も新たな視点で捉えることができるかもしれない。「みんなで、わいわいがやがや、楽しい授業」「みんな同じようの教育」を一考する機会に出来たらと思う。小笠原流礼法は、ご承知のように、相手を大切にすることに始まります。人と人との間、「間合い」が大切、「親しき仲にも礼儀あり」なのだから。ここは学校「お友達付き合い」ではなく厳しい付き合いを等と人間教育を考えたいと思う。
- ・ 何も言うことのない学校ということになります。安全・安心な学校づくりはもっともなことだと思う。ただ、危険を察知し、それに適切に対処する能力は生き抜くうえで極めて大切な能力であることを再認識する必要がある。

II 達成状況と改善策について

各アンケートの結果から、今年度も安定した学校運営がなされ、教職員と児童・保護者・地域との関係も良好であることがうかがえる。今年度の具体的な取り組みを継続させていく中で、さらなる教育活動の充実を目指していきたい。来年度以降も新型コロナウイルス感染症拡大が学校教育にさまざまな影響を与えることが考えられるが、さまざまな制限のある中でも、子どもたちのためにできる最大限のことを実現させていくために、学校と家庭・地域が一体となり小笠原小学校の教育活動を推進していきたい。